

領域を超えた学問的コミュニティを目指して —平成29年度長野大学研究交流広場の記録—

上田市の郊外塩田平に位置する長野大学は、高度経済成長ただ中の1966年に当時の塩田町と住民の熱意により公設民営大学の嚆矢として開設された。それ以来地域に根ざした大学として50年を超える歴史を積み重ねてきた。この礎の上に教育研究の水準と内容を、そして大学としての存在価値をより高めるために、新たな発展をめざして2017年4月に上田市が設置する公立大学法人が運営する大学へと生まれ変わった。

この転換の目的を達成するためには、長野大学の教員が心を新たに教育と研究に取り組む必要がある。本学では私立大学時代以来より、教員が各自の研究成果を発表して議論し切磋琢磨しあう研究会を長らく続けてきた。2000年代に入って、地方私学を取巻く環境が厳しさを増すなかで、教員相互の研究に対する熱意を今一度奮い立たせるために、この研究会は「研究交流広場」と名前を変えて運営されてきた。長野大学が公立大学としてさらに前進するためには、教員の研究活動の活性化は最重要課題の一つである。大学としての研究支援政策を強化するために、研究推進室では、科学研究費助成金等の外部資金に応募する教員の支援策、国内・国外研修に加えて新たなサバティカル制度の提案などを行っている。これらの制度の充実により教員が研究を行う客観的な条件を整えることはもとより重要であるが、しかしそれと同等に重要なのは教員が研究に向かう姿勢の醸成、主体的な条件の強化である。この目的のために研究交流広場は重要な役割を担う。

本年度の研究交流広場は4月から年明けの1月まで6回開催された。6月は新たな試みとして、科学研究費助成金への応募を促進するために、現在科研費に採択された研究を遂行している教員による報告会を行った。その他の回はこれまで通りの研究報告であり、長野大学の学部学科と教員の構成を反映して、デス・エデュケーション（死の準備教育）、障害児教育の歴史、社会福祉協議会の使命、放置竹林の利用方法と多様である。1月最後の広場は、私事ではあるが、京谷が「長野大学での研究を振り返る」と題して報告した。教員が自分の研究史を語るのは初めての試みであったが、先輩教員が成功も失敗も含めて語り、それを参考に各教員が自分の研究を見直すことは、教員が研究に向かう姿勢を再考する良い機会ではないかと考える（この報告は次年度の紀要特別号に掲載予定）。

ここにお送りする特別号では、外部の研究者による学内研究会として開催された、歴史学の安田常雄先生（神奈川大学・特任教授）の講演「民衆経験を学問が捉えるために」を先生のご厚意により掲載させていただけることになった。歴史学にとどまらない日本の近代の社会科学に対する深い造詣に裏打ちされた先生の講演には圧倒される想いであった。改めて御礼を申し上げる。

2018年3月

研究推進室長 京谷 栄二

平成29年度長野大学研究交流広場の報告テーマ及び報告者一覧

第65回(2017年4月26日)

私のデス・エデュケーションの歩みー〈いのちの主体性〉論のためにー

.....小 高 康 正

第66回(2017年5月31日)

東京都立光明養護学校と肢体不自由教育史

.....丹 野 傑 史

第67回(2017年9月27日)

社会福祉協議会新人職員が考える社協の使命に関する一考察

.....合 田 盛 人

第68回(2017年10月25日)

放棄竹林の現状把握と利用価値創出に向けた竹粉利用の検証

.....森 本 英 嗣

第69回(2018年1月31日)

長野大学での研究を振り返る

.....京 谷 栄 二